魔物に娼婦

本田サイモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔物に娼婦

【Ｎコード】
Ｎ２０２９Ｘ

【作者名】
本田サイモン

【あらすじ】
頭のネジがゆるめな女性、岸本美紀（２０）がある日魔界へ迷い込んでしまう。
元の世界へ帰るためには娼婦として働きノルマをこなさなければならないのだが、
人間界と違い、魔界の娼婦は体ではなく優しさを売るのだという。
シリアスに見せかけた完全コメディです。文章力の無い者が書いておりますので、本格派活字中毒な方にはお勧めいたしません。※印は暴力表現または性表現、あるいはその両方の要素が含まれていま

す。ご注意ください。

01　白黒のモラル

やっと日本人が手に入った。
そう呟く女性の下半身は蛇のそれで、うねうねと私の座っている椅子のまわりを囲む。
繊細な手つきで髪を梳く彼女が言うには、私はここに拾われ、そのおかげで外を
縦横無尽に歩きまわっている魔物達にオモチャにされず済んだのだと言う。
薄暗い部屋を見渡すと壁に鹿の剥製や、毒々しい色の壷、格子をはめた窓などが目についた。
ここは彼女の部屋だろうか。

「名前はなに？」
「あ、岸本（きしもと）　美紀（みき）です」
「そう」

ひとしきり髪を梳いたかと思うと、
今度は肌に丁度いいくらいに温められたタオルで顔を拭かれた。

「お客様には下の名前は教えちゃ駄目よ。私が良いと言うまではね」
「ぐふっ。秘密ですね？了解でぃす」

紫色の目がこちらを見据える。赤い髪とよく溶け合っていて不気味な綺麗さを醸（かも）し出していた。
あんた軽いわねーと呆れた声が返ってくる。

――この人との出会いは数時間前。
私は友達の誕生日プレゼント用に四葉のクローバーを捜し求めながら近所にある
神社の裏の林を駆けずり回っていた。目標はみかん箱（L玉）一杯分だ。
たまに見かける殿様バッタを数匹、天道虫を少々。とどめにアリさんもちょっと入れて置いた。
「共食いするなよー」とみかん箱の中に広がるクローバー王国に話しかける。

気付くと手元が暗くて見え辛くなっていた。
どうやら夢中になりすぎて日が落ちてしまったようだ。
よっこいしょういち～～と勢いよく立ち上がって、長時間酷使した腰をぽんぽん拳で叩いた。
さて帰ろうかと視線を上げると、なんだかいつもと林の雰囲気が違う。
枯れ木みたいなのがぽつぽつと間隔を空けて並んでいる他は、周りになにもない。何故だろう。
空なんて「俺毒もってるぜ」的な見事な濃い紫色色だ。
しかし荒野のようなこの場所は日本ではなかなかレアなのでは？
記念に土を集めとこう。これも大好きな友達のためだ。

「こんばんわお嬢さん」

そんな中誰かが気持ちよく挨拶してきた。

「こんばんわ～…あ、いや、おばんです～」
「…え？なんで今言い直した？」

土をダンボールに詰め込みながら振り返らず挨拶を返す。
しかし初対面なのになかなか良いツッコミをくれた。
この人いいひとだ。四葉のクローバーを進呈しよう。や、こっちの殿様バッタの方がいいかなぁ。
大きいし。

「……お嬢さんさ、僕になにか言う事ないのかな？」
「ん？バッタよりアリさんのが良かった？」
「なんの話？！！」
「待っててね～うちは可愛い子揃ってるよ～」
「…ねぇ頼むよ。僕と会話して」

みかん箱王国を物色してるとぽん、と後ろの方からツッコミさんに肩を叩かれる。
その手を見ると、ぶどうのような紫色をしていて爪が異様に鋭く尖っていた。
しかしその手の持ち主の姿はもっと異様だった。髪の毛がなく全身紫色で翼が生えている。
目は額とそのすぐ下に縦並びでかでかと顔についており、口が耳のあたりまで裂けていた。
トカゲのようないい感じの尻尾までついている。

「ぎゃあああああ！！」

思わず叫び声を上げると「お、そうそうこれこれ」と嬉しそうにツッコミさんは笑った。
ポケットから素早く携帯を取り出し画面を見ると真っ暗になっていた。電池切れだ。
ああどうしよう。

「せっかくバ〇キンマンに会えたのに！」
「違(ち)げぇえぇえぇえ！！」
「あなたバ〇キンマン、バ〇キンマンていうのね？！」
「色々ネタ混じってません！？？」
「バルス！！」
「お前もう黙れやぁぁあああ！！！」

がっと口をツッコミさんに勢いよく塞がれる。
その瞬間、肌にチリチリした熱さを感じた。
…誰か私たちの至近距離でサンマでも焼いているのだろうか？と考えていたらツッコミさんが
突然炎上しだした。絶叫しながら辺りを転げ回るツッコミさん。
近場に水が無かったので私は咄嗟に周りの土を掬ってかけ、消火を試みた。
炎の勢いは弱くなったが土が目に入ったらしく、今度は「目が、目があぁあああ！」と
悶絶し始めた。あ、ごめんと小さく謝る。

「怪我は無い？かわいいお譲ちゃん」

色気のある声に振り返ると、上半身が人間の女性で下半身が蛇のような彼女がそこに居た。
これがラミア店長との出会いだった。

０２　薄暗い楽園の最初

私の他にも何人か迷い込んだ人が居たらしい。
人種は様々だが日本人は私しか見かけない。暫くの休憩時間を与えられた後、
大広間らしき場所に集められた私たちが受けた説明はこうだ。

お客様への接客時間は一人一時間。ただし追加料金で延長も有り。
体での接触（要はエッチ）は最後までしなければある程度ＯＫ。
あくまでこの店の売りは”精神面での癒し”なのだそうだ。
お客様の要望によっては外デートも有り得るという。ただし店長に許可申請しなければならない。

…以上のことを踏まえ、ここで一生懸命働きノルマをこなせば人間界に返してくれると
彼女は言った。彼女、とは下半身が蛇のラミア店長のことだ。

ノルマは一万人のお客を取ること。
お客様に粗相をし、途中で帰られてしまったり店に苦情が来た場合はノルマ人数を
１０人ずつ増やされる。
娼婦達は一人一人個室の仕事部屋を与えられ、そこでお客様を向かい入れ仕事をする。
ちなみに魔界にいる間、人間は歳は取らないそうだ。なので浦島太郎状態を回避するため
人間界へ帰るときはここに迷い込んだその時間にきっちり帰してく

れるという。
なんという好条件。しかしさすが魔界。なんでも有りだなぁ。
これだけの条件を出されれば誰も断れないだろうなぁ。些か待遇が良すぎて胡散臭くても。
不安そうに青ざめながら各々振り当てられた仕事場へ向かって歩き出す
皆に習い私も自分の部屋に向かう。

仕事部屋は実にシンプルだが、置いてある調度品が明らかに怪しいもので埋め尽くされていて、
今にも黒魔術が始められそうな雰囲気だ。なんだかどきどきして「ぐふ」と笑い声が漏れる。
あの首をつられてるテディベアはどこで買い揃えたのだろうか。なかなか愛らしい。
キッチンや冷蔵庫、シングルベッドなどといった家庭用品はしっかり揃っていた。
ボードゲームやＴＶゲーム、お手玉だとかおはじきみたいな娯楽用具も幅広く置いてある。
ぼんやりそれらを眺めていたら早速扉がノックされた。
「入ってますよー」と答えると数秒間を置いてズルリと大きな影が部屋の中に入って来た。

「……お前が新人か？」

這うように入ってきた私の第一番目のお客様は大きなムカデだった。
その体躯で部屋の三分の一が埋まる。大きくて赤い目がトンボのよ

うに飛び出していて
そこに私が映る。まるで鏡のようだ。
じっとりと湿っている長い体には無数の足がわさわさと忙しなく動いていた。

「でっっかぁぁあ！」

第一印象の感想を述べ、ムカデさんに手を伸ばす。体に触れるとびくりと跳ねた。

「おい」
「あ、すいません。触られるのヤでした？」
「……触られるのが嫌と言うより、触ることを嫌がられる側だ」
「へぇ、勿体無い。かっこいいのに」
「……」

ムカデさんは暫く黙っていた後、出入り口の前にいたラミア店長に目配せする。
それを合図にばたんと静かに扉が閉まった。たぶん初見は合格ということなのだろう。

「人間のわりに怖がらないな」
「怖いというよりかっこいいですよ。ここは譲れませんな！」
「いや、譲るもなにも……」
「そういえばお菓子置いてあるみたいなんですけど、食べます？」
「……甘いものはあるか」
「ありますよ～。ええっと、クッキーとようかんと……黒豆が」
「黒豆が？！」
「なぜか置いてあります」

ラミア店長の好物なんだろうかと考えながら袋を開け、備え付けの皿に移す。
どうぞ、とお菓子を渡すとムカデさんはちょっと嬉しそうに顔ごと皿に顔を突っ込んだ。
がしゅがしゅと豪快な音がする。皿をあまり動かさないように支えるのが大変だ。
しかし一人目のお客様がムカデさんだとは。
昆虫やでっかい怪獣が大好きな私に対する挑戦か。受けて立とうじゃないか。

「ぐふっ。可愛い～」

隠す気もなく漏れ出たその呟きにムカデさんの口の動きが止まる。

「……なに」
「もう食べないんですか？」
「お前、今なんて」
「意外と少食なんですね。かんわいぃ～」
「……っだ、いや、お前！俺のどこを見てそんなこと……！」
「いやぁ、口の動き？甘いものが好きなとこ？真っ赤な大きい目とか？？」
「……」

おや？怒ったかな？それとも照れているんだろうか。如何せん相手が虫さんなもので
表情が分からない。
ゆらりと赤くて大きな瞳が揺れた気がした。

「…ふざけたことを」

低い声を出されたので威嚇されたと思ったが、そっぽを向いてもこの場から出て行こうと
しないのを見るとどうも照れてるという考えが有力そうだった。
けれどそう思ったのも束(つか)の間、ムカデさんはゆっくりした動作で戸口まで移動した。
（あ、嫌われちゃったか）
溜め息をついてその後姿を見送る。こんなに早く帰るならお茶も一緒に出せばよかった。
甘いものだけじゃ喉が乾くだろうに。
――しかし、すぐにムカデさんはまたこの部屋に帰ってきた。
「んあ？どうしました？この食いかけクッキー持って帰ります？」
「……いや、それはここで食べる」
後ろのほう、開いた扉の横にラミア店長がまたいたのが目に入った。
にっこりと満足そうに微笑みながら親指をぐっと立てる。

「二時間の延長を申し込んできた」

ムカデさんのその言葉に無意識にガッツポーズしてしまう。ラミア店長の笑顔の理由はこれか。
私の初陣は見事大勝利だった。
にんまりと笑みが零れる。しかしこれは言っておかねばなるまい。
「ぐふっ。延長の申し込みはこの部屋に付いてる電話からもできますぜ、旦那」
「そ、そうなのか……」

そして今度こそムカデさんにお茶を淹れてあげよう。

03　アイロニィ

浅黒い毛並み。三つに分かれた頭。骨肉を噛み切るためだけにあるような牙。
ふさふさの尻尾、鋭くも動物独特の愛嬌ある瞳、あの前足テーブルに乗せた背伸び姿勢。

「ワンコやぁあ〜〜！！」
「ぐお？！なんだお主？！！」

いきなり横抱きに飛びついた私に怯んだ様子で体を引くワンコさま。
この店は中央にでっかく陣取った出入り口の前に、娼婦の特徴・性格を記した紙を顔写真付で張り出す。お客様はそれを見てどの子が良いか選べるようになっている。
娼婦の方からお客様を誘うのも有りで、積極的な人は出入り口でお客様をナンパしたりする。
私はトイレに行こうとしてたまたまそこを通りかかり、張り出してある娼婦紹介の紙が身長的に見にくいらしく一生懸命背伸びをしていたワンコさまと出会ったのだ。

「ワンちゃんワンちゃんワンちゃんやぁあ！！」
「テンション高いな！気味が悪いから近付くでない！！」
「ワンちゃんワンちゃん！ワンちゃんですぞ〜〜！！」
「だから近付くなっちゅーのに！！私を誰だと思って」

「モフモフモフモフワンちゃんやぁ！！」
「いい加減かみ殺すぞこのっ……店長！助けて店長ーー！！！」
ワンコさまを周りを円を描くように俊敏に動き回っていたらラミア店長にがしっと捕まえられた。
ワンコさまは今がチャンスとばかりに逃げ出し、店を出て行った。
あぁ…と残念そうに呟く私を尻目にラミア店長は長く重たい溜め息を吐く。

「お客様を誘うなら誘うで、もっと他のやり方ってものがあるでしょう」
「私にあはーんうふーんは無理ってもんですな」

こつん、とキセルで軽く額を小突かれる。
しょうがないわぁといったラミア店長の苦笑いが慈しみに溢れているように見えて予想外に
愛らしい。「良いもん見たなぁ」とその表情に見惚れる。
思ったよりも可愛がって貰えていることを実感した最中、店長と私を遮るようにぬっと茶髪の
頭が間を割り込んできた。

「微妙顔」

突然の嫌味に驚きつつ、至近距離で見たその美人さんの顔の歪み具合が気難しいアヒルに
似てる気がして「ぐふ」と笑う。それをどう取ったのか、美人さんは更に不愉快そうに顔を
くしゃくしゃにする。しかし美人は顔をどこまでぐしゃにしても美人だ。
ラミア店長が「騒がしくてすみません」と丁寧に誤っているので多

分お客様なんだろう。

「なにに笑ったんだよ。お前キモい」

「やーすいません。アナタは美人さんですねぇ」

先ほどから思っていたことを口に出したら、くしゃくしゃに寄っていた皺がさっと

引っ込んで色白つるつる美肌青年の顔をしっかり確認できた。

耳にピアスがいーち、にーい、さん……三個付いていて、左頬には目の丁度すぐ下辺りから

なんとも形容しがたい形の、刺青らしき模様が入っている。茶というよりはごげ茶に近い色の髪が

首辺りまで伸びていた。まるでビジュアルバンドのような容貌だ。

口にピアスは痛くないのだろうかと目の下のクマが濃い美人さんの口元を凝視する。

「あんたはもう自分の部屋戻りなさい」

店長に促されて「はーい」と軽く返事をし、仕事部屋に向かう。

が、ここで可笑しなことに、後ろに美人さんの気配を感じ振り返る。

「こっち見んなブサ面」と吐き捨てられたので気のせいかと思い直しまた歩き出す。

しかしやっぱり美人さんに付いて来られてる気がする。

扉を開け中に入ってからそれが気のせいではないと確信した。

美人さんが私の部屋に入ってきたからだ。

「コーヒー淹れろ。ミルク入り砂糖なし」

「お茶菓子は？いります？」

「あるもん全部出せ。お前が誘ったんだから当然だろ」

「あ、はいはい」

ん？私美人さんを誘ったかね？いやでも男女間のやり取りに詳しいわけでもない自分だ。
何か美人さんを誘うようなニュアンスを知らずに使ってしまったのかもしれない。
ふむふむ。異性間交友とはかくも難しきかな。

「コーヒー入りましたよ～」
「…そこに置いてあるの、チェスか」
「ん？ええまぁ、備え付けで置いてあるんで。ＴＶゲームとかもありますよ」
「じゃあチェスやってからＰＳＰ」
「はいはい」
「……お前のそのダルい返事、なんとかなんねぇ？むかつく」
「いやぁ、私の持ち味なもんで」
「はぁ？そういうキャラは可愛いから許されんだよ。お前がそれとか無いわ」

ぶつぶつ言いながらちゃっかり椅子に座って黒の駒を手元に置く美人さん。
もしゃもしゃ両手でお菓子を食べている。
言葉が厳しいわりにやっている事は可愛らしいのであまり嫌な気分にならない。

「美人さん、何でそんな人間ぽいんですか？他の人たちはもっとこう」
「インフレイム」
「ん？お名前ですかね？」
「そうだよ」
「じゃあ、インフレイムさん」

「……悪魔ってのは人間と契約できて一人前だからな。内容によっては人型にならなきゃ
いけない場合もある。っていうより、人型になんなきゃこなせない仕事の方が最近多い」

だから人型になれない＝人間と契約しづらい＝落ちこぼれ。の方程式になると
美人さんは言った。
魔界の人たちはやっきになって人型になる方法を身につけるのだという。
ちなみに美形が多いのは万人受けするし相手を油断させ、たらしこみ易いからだそうだ。
その話を感心しながら聞いていたらいつの間にやらチェックメイトを決め込まれていた。

「つ、強いうえに早いだと……？」
「お前がザコいんだばーか」
「いやぁ、美人さんが強いんだと思いますがねぇ。頭良いんですねぇ」
「たかがゲームで何言ってんだ。そんなに俺からの好印象欲しいわけ？やめろよキモい」
「あ、じゃあ一回戦終わったしゲームやります？」
「は？何言ってんの。早く終わりすぎてつまんねーよ。もう一回やる」

そのもう一回、は二回戦が終わった後にもやってきた。
結局は２２ゲームほどつき合わされ、私は悟る。
（インフレイムさんは褒められるのが嬉しいんだなぁ）と。
あまり褒めすぎるといつまでもそれを続けたがる習性があるらしい。
しかも、

「ちょっと寝る」

と言って布団の上に寝転がった。
起きるまでに晩御飯の準備と、時間延長の連絡を入れておけと言い残して。
キッチンも奥に備え付けられてるし、料理が出来るには出来るが…。

――むぅん。夕方からムカデさんの予約が入っているのだと、いつ伝えよう。

０４　自己犠牲※

魔物さんには人間の言葉の種類は関係ないらしい。
英語だろうがフランス語だろうが日本語だろうが普通に理解でき、
また相手にも自分の
言葉を普通に理解させられる。ようは翻訳機を内蔵したパソコンみたいなものだろうか。
こちとらこの世界に飛ばされてから娼婦仲間の外国の方から「日本は英語圏」と勘違いされ、
全く分からない英語でぺらぺら挨拶されて困っていたりするのに羨ましい限りである。

「Ｗｈｅｎ　Ｉ　ａｍ　ｔｏｏ　ｕｎｐｌｅａｓａｎｔ　ｔｏ　ａｃｃｅｐｔ，　ｄｏ　ｎｏｔ　ｍａｋｅ　ｉｔ　ｈｕｒｔ！」

だからこんな声が隣の部屋からここ一週間、連日のように聞こえてきてもさっぱり
理解できない。
叫んでる。嫌がってる。泣いている。そのくらいしか分からない。
だけど場合によってはそれだけで十分なときもある。

――次の日。

「いらっしゃいましな～」

ゆるりと、来店されたそのお客の前を塞ぐ。
塞ぐと言っても体格がぜんぜん違うので実を言うと全く塞げてなどいない。
熊よりも二周りほど大きなその巨体に気後れしながらも笑顔を絶やさぬよう努める。
頭は獅子。そこから下は人間と似たような体系だが、爪が鋭く、ライオンの尻尾が
ゆらゆら威嚇するように動いている。
さて困りましたなぁ。レベルが違いすぎる。

「邪魔だ」

軽くどかされただけで抵抗できない圧力を感じさせる。
だがここで怯んでいては始まらないので退かされた拍子にその手を掴む。

「たまには趣向を変えて地味顔を相手してみません？」
「顔どころか体も中途半端のくせに、よく俺を誘える」
「そこが良いってゆうなかなか粋（いき）なお客さんもいらっしゃいますよ」
「俺にその趣味はない」
「まぁそう言わず、よーく見てみて下さい旦那！ほれほれ」

無い色気を１０％ほど掻き集めて披露してみる。汚いものでも見るかのように険しくなる
相手の表情。確実なる失敗を悟る私。
どん、と人差し指を胸の中央に押し付けられた。その衝撃に一瞬息が出来なくなる。

「失せろ。でなきゃ殺す」

「…それは出来ない相談ってもんです」

押し付けられた指を抱える。
爪が鎖骨に喰い込むが、その痛みは耐えなければならない。
ここを我慢しなければ、我慢し難いあの女性の叫び声をまた聞く羽目になる。
それは正直ご勘弁です。
刺さった爪のせいで少しずつ血がにじんでくる。ふいにそれをライオンさんに舐め取られた。
生暖かい舌の感触が、これから捕食される草食動物のような不安を私に植え付ける。

「そんなにぶっ壊して欲しいか」

まぁなんてエロティカルでグロテスクな表現。と不覚にもちょっとトキめいてしまった。
自分に少々マゾっけがあるのは知っていたがここまでとは自覚が無かった。
ぐい、と片手で持ち上げられ部屋まで運ばれる。
入ってすぐライオンさんは扉の鍵を後ろ手でかけると、私を壁に押し付けた。

「さて、どう接客してくれるんだ？ん？」
「しょっぱなからアクセル全開はどうかと……ぐえっ」

親指で喉元を圧迫され、息苦しくなる。
随分サディスティックな楽しみ方ですこと。

「お隣さんとも…こんなハードなプレイ、してらっしゃるんですか」
「……あの女、お前になんかチクリやがったのか」

その質問の語尾と一緒に、指の力が強くなる。いよいよ呼吸が出来なくなってきた。
そんな私の表情をしばし吟味(ぎんみ)するかのように眺めた後、ベッドに投げつけた。
咳き込んでいると片手で私の胴体を押さえ付け、顔を近づける。
勇ましい獅子の顔が眼前に迫り、私はびくりと体を震わせた。

「…自己満足ってやつで」
「なに？」
「彼女の悲痛な声がだだ漏れなんですもん。すぐ隣の部屋ですから。それ聞くのヤなんです」
「だからどうした。俺と楽しんでただけのことだろうが」
「いやいや、人間が楽しむときってのは普通泣き叫びませんて」
「てめぇらにいくら払ってると思ってんだ。たかがそれくらいで」
「それくらい？」

ベットに縫い付けられている状態から相手の襟首を掴む。
そこで初めて相手がスーツを着ていることに気がついた。

「だったらこれからは私指名して下さいよ」
「お前みたいな貧相なの指名して、俺になんの得がある」
「ぎゃんぎゃん泣くだけの人よりは、楽しませてあげられると思いますけどねぇ」
「言うじゃねぇか」

襟首を掴んでいる手に更に力を込める。

「いいから私にしとけよ」

それを聞いて何を思ったのか、ライオンさんは私の胸にぐったりもたれ掛かった。
数分ほど経って突然立ち上がると乱暴に扉を開け、そのまま出て行った。
私しか居なくなった部屋の静けさを噛み締めながら頭痛のしてきた頭をさする。
今日は早計すぎた。
反省点はその一言に尽きる。

（ライオンさんは、隣の女性が好きなのか）

やっちゃったなぁ。
愛情表現が下手な部類のお方だったのかそれとも魔物ゆえの習性なのか。
なんにせよ彼にとても痛そうな顔をさせてしまった。
加害者を被害者にしてしまった。
あのスーツは、ライオンさんなりの誠意だったのか。いや私の考えすぎか？

（分からないなぁ。なにせ相手が相手だから）

０５　悪循環な欲求

寝泊りは仕事部屋を寝室兼用で使えばいいと店長は言ってくれたので、
寝る場所には困らない。

さらにこの店は朝・昼・晩と三食きっちりまかないを出してくれる。
娼婦達はお客様と過ごすので決まった時間にご飯が食べられるとは限らず、
皆まちまちな時間に、来客がない事を確認して食堂へ食べに行く。
例外はお客様に手作り料理を頼まれたときか、一緒に外食するときだけだ。
しかし外食は娼婦たちにまったく人気がない。
ある人いわく「ゲテモノが可愛く見えてくるレベル」だそうだ。

そんなん言われたら食べに行くしかないじゃマイカ！
と意気込んで外出申請を店長にしにいったのだが…。

「うちの客はね、”人間に癒してもらいたい”なんて変わり者ばっかりだから人間を
酷い扱いしないけど、魔物のほとんどはそんな配慮してくれないのよ？
一方的に捕食されるだけで抵抗のできない人間なんて、おいしいご飯以外なんでも
ないんだから。特にあんたみたいなヘラヘラした奴一瞬でがぶりなの。分かってる？」
「うぃ」

「うぃ、じゃないから。私は店があるから一緒には行けないし、お客様と一緒に出かける
訳でもないから、誰も助けてくれないのよ？」
「分かってますよ店長」
「分かってない。外出は駄目」
「うぇええ～？そんなぁ」

さっきから説教と「外出は駄目」を繰り返す過保護ともいえるラミア店長。
しかしこんな事もあるだろうと予想し準備にぬかりはない。

「分かりました店長」
「いいえ分かってない」
「いやそういう分かってます、ではなく」
「じゃあ今までの話分かってなかったわけ？」
「だから、いや……ムカデさんを！呼ぼうかと！！」
「ムカデさん？」

あいつか…とぶつぶつ言い出した店長をじっと見つめる。
まだ何か考え込みながら、けれどどことなく諦めたように申請書に判を押した。
それを見た瞬間店長の気が変わらぬうちにムカデさんを呼ぶべく、受話器を取った。

――外に出るとどんよりした濃い紫とグレーが混じったような空が私を迎えた。
これはこれである意味芸術的な配色だと思う。
ギャアギャアと不吉な声が聞こえてくるがあれは鳥の鳴き声だろう

か。
よし。今日は絶対鶏肉を食べよう。そんな気分。
「予想はしてたが、人間ってのは本当に歩くのが遅い。俺の上に乗れ」
「え、いいですか？！うぉっほい！」
「何だその叫び声……。で、どこに行くんだ」
ムカデさんが尻尾を下ろしてくれたので、そこから頭のほうまでよじ登る。
たっかい！ナニコレ超高い！ぎゃほほぃ！！
「とりあえず料理屋さんへ！ゴハンゴハン！！」
「お前…まだ１０時だぞ」
呆れた声が返ってきたが気にしない。それが目的で来たのだから。でも確かにまだそんなにお腹が減ってない。どうせなら極限まで減らしてから食べるのも
一興かもしれない。そのほうがより料理を味わえるだろうし。
「じゃあ、ムカデさん。図書館か本屋ってありますかねぇ。ここ」
「あるにはあるが……壊滅的なほど治安の悪い場所だぞ」
「え？なぜに？」
「本を欲しがるようなのは、相当性質（たち）が悪くて頭の良い悪魔ばかりだからな。要は
人間をどう罠にはめてやろうかと画策してる連中が、本を必要としてるって事だ」
「人間を騙すにはそれなりに博識になる必要がある。ってとこですかね」
「ああ。そうだ」

そういえばラミア店長に拾われれて最初に、この世界の必要最低限の知識を教えてくれた。
魔物と称されるのは人間と契約ができていない者で、
悪魔と称されるのは人間と契約ができている者。
その二つを総合して、魔族と呼ぶ。
お客様に失礼の無いよう、できることなら種族名は使わないほうが良いと言われた。
なにせ相手を「魔物」と呼ぶことは「お前ニート！」と言っているも同然なのだ。

「ようはハイレベルさんいっぱいいらっしゃると」
「俺じゃ庇(かば)いきれんかもしれんぞ」
「だーいじょーぶでーすよぉおぅ」
「その喋り方やめろ」
「私が出掛けるのにあれだけ反対してたラミア店長が、ムカデさんと一緒ならって簡単に
　許可してくれましたもん。ムカデさんもハイレベルさんなんでしょ？」
「……」
「人型にはなれますか？」
「……お前は、思ったよりも油断ならん奴だな」
「うふふ。ムカデさんたらお上手ぅ」
「…褒めたわけじゃ……いや、いい。もういい」
疲れたように溜め息を吐くムカデさんに「ぐふ」と笑いが漏れる。
油断ならない、かぁ。良い響きですなぁ。人間一度は言われてみたい単語だ。
「じゃあいっちょ図書館までお願いいたしますムカデさん」

06　メシア・コンプレックス

「かっっけぇえええ！」
「そ、そこまでか？」

私のテンションに引き気味のムカデさん。でも仕方ない。本気でかっこいいのだ。
黒のストレートな髪は肩までありサラサラと絹のように流れる。
少し憂いのある青年風味の顔立ち。
目は鋭い一重だが、ふちが黒く印象的。紅い瞳がまさに悪魔、という感じだ。
服装は黒無地Tシャツにジーンズのカジュアルさ。首にはシルバーアクセのチョーカー。
高い身長と長い足はもはやモデルさん並である。

「いや～これでぐっとデートっぽくなりましたね。ウッシッシ」
「ウッシッシて！！」

ムカデさんから軽快なツッコミを貰い、満足する。
気を取り直してルーヴル美術館ばりの建物「図書館」の出入り口を見上げた。
ゾウさんでも通り抜けさせる気なのかというくらい大きな口を空けているそれは異様に
恐ろしく見えた。しかしその恐ろしさが、イイ。まるで遊園地のお化け屋敷のようだ。
両脇にはガーゴイルらしき石造が門番をしている。

「おい。腕のやつは外して行け」
「ん？何でです？」
「雑魚や中級程度なら魔除けにもなるが、ここに居る連中相手じゃ神経を
　逆撫でするだけで、役に立たん。そこら辺の木にでも吊るしておけ」
「うぇ～？やですよぉ～盗まれちゃいそうですもん」

このミサンガはラミア店長の髪を編みこんである。
外出する際、文字通り「お守りに」と借りたものである。

「魔界に住んでる連中にそんなもん盗む奴はいない。自分の具合が悪くなるだけだからな」
「……うぁ～ぃ…」

渋々返事をし、目に付いたやせ細った木の枝にミサンガを掛ける。
盗まれませんように！と念をしこたま送り込みながら図書館の中へ入る。
外見も広かったが、中は中でこれまたただっ広（ぴろ）い。
レトロな作りの木造感覚な内装に、左右前後どこを見ても本を敷き詰めた棚が並んでいる。
中央に受付らしきものが見えたのでそこへムカデさんを引っ張っていく。

「すいまっせ～ん」
「あ、いや……あ、はい…なんで……しょう、か？」

歯切れの悪い受付のお兄さん（？）はあちこちに縫い目の痕（あと）があった。
顔色は土気色どころか濃い紫色でまさのゾンビそのものの様相を呈

していた。
濃紺の髪は短めに、だが左目は隠すように整えられている。
「人間用の、というか人間が読める本とかありませんかね？」
「…は、い……あの、あ……3階と、４階に…ん…あの、人間の、本が……あり、ます」
「日本人のってどっちの階ですか？」
「さ、いや……3、階…です……けど」

それを聞いて「ありがとうございました～」と言って、受付さんの指差してくれた右奥の階段まで小走りする。
本を扱っている場所には必ずする、独特の匂いが胸を弾ませた。
このぎしぎしと一踏みごとになる階段もなかなか趣(おもむき)がある。
この中に居るとなんだか魔法が使えそうな気分がしてきた。今ならこの手からホイミくらいは出るんじゃないか？いっちょムカデさんにでも使ってみるか。

「ホイ……あれ？」

今まさに己の手へＭＰを集中しようとしたとき、本棚の一角から見覚えのある浅黒い
ふっさふさの尻尾を確認した。本の隙間から三つに分かれた頭も見えている。
これはもしかして、まさかそんな……。

「ワンコさまやぁあああぁあ～～！！」

私の声を聞き、ワンコさまは毛をざわっと逆立てこちらを向く。
ムカデさんはぎょっとして私の口を押さえた。

「ふぁんふやんひぃおむぅ！」
「くっ……またお主か！！」
「何だ？お前ケルベロスと知り合いなのか？」
「ひでぷ！！」
「ひでぷってなんだ？！」

三人でばたばたしていると、誰かが控えめにワンコさまに声を掛けてきた。

「Ｈｏｗ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｄｏ　ｉｔ？（どうしたの？）」

その優しく響く特徴的な声に聞き覚えがあり、彼女の顔を見た。

「いや……問題無い。お前の店の仲間に会ったので驚いただけだ」
「Ｏｈ，　ｉｓ　ｉｔ　ｔｈａｔ　ｐｅｒｓｏｎ？（ああ、あの人？）」

Ｈｅｌｌｏ、と手を振られたのだが口は塞がれているため、手だけで挨拶を返した。
ブロンドの長い髪はゆるくウェーブがかかっていた。
二重の大きな瞳に、白い肌に目鼻立ちのくっきりした端正な顔。
屈託の無い笑顔は実に好印象で、この間まで隣の部屋で悲痛な声を上げていた女性と
同一人物だとは考えがたい程だった。
ライオンさんが好きになるのも頷ける。きっと、強(したた)かさと優しさをない交ぜにしたような
この雰囲気が良かったのだろう。実際、私がすこぶるツボに入った。
そうだ。ライオンさんは、どうしただろう。まだ彼女の元へ通っているのだろうか。

「こやつは苦手だ。さっさと帰ろう」
「Ｓｕｃｈ　ｗａｙ　ｏｆ　ｓｐｅａｋｉｎｇ　ｒｕｄｅｎｅｓｓ
（そんな言い方失礼よ）」
「俺がこいつを抑えておくから、今のうちに行け」
「おお、かたじけない。テンペランス殿」

ムカデさんの名前、テンペランスって言うのか・・・。
考えているうちに、二人は一階の方へ行ってしまった。それを見届けてからムカデさんは
私を抑えていた手を離す。

「お前…あいつに相当嫌われていたが、何をしたんだ」
「いやぁ、ストーキングを少々」
「本当に何してんだお前？！」
「ほっほっほ。それより本を見ましょうや、テンペランスさん」

名前を呼ぶと複雑そうな表情をした。呼ばれると何か不味いことでもあるのだろうか。
それとも単に名前で呼ばれるのが嫌なのか。そこは図りかねた。
――ライオンさんのことは、後でお店に帰ってから聞こう。

０７　君と僕の確率※

指名してくれたお客さんが延長を希望する場合はままある。
しかしノルマ人数を早く達成したい人には至極迷惑な話で、
「延長」は「指名」の数に入らないのである。
だから一人の客が延長しまくってその娼婦を一日独り占めしようもんならその日の指名数は
一人。となってしまうわけである。
ちなみに同一人物が同じ娼婦を何度かに分けて指名しても、２４時間経つまではやはり
一カウントにしかならない。
ただその代わり延長料金として店に支払われた金額の一割を娼婦は受け取れる。
「早く元の世界へ」と考えている娼婦仲間さんたちにはかなり嫌がられている制度だ。

まぁそのお陰で昨日、ご飯食べに外出できたのだのだから私に文句は無い。
視覚的にも嗅覚的にも素晴らしくえげつない料理を心行くまで堪能できたし、
目ぼしい本も借り、ラミア店長のために黒豆もお土産に買えた。
ふと時計を見ると１２時を回っていた。
午前中はお客が誰も来なかったな、と思い至り玄関へ向かおうと席を立つ。
さすがにそろそろ仕事をしないと不味い。柄じゃないがお客さんを誘惑しに行こう。
ドアノブを回そうとしたした瞬間、コンコンと控えめなノックが聞

こえてきた。

「んぁ？はーい…」

返事はしたが、誰だろうか。
ムカデさんも美人さんも今日は予約は入れてない。出入り口のに貼ってある私の紹介文や
写真じゃ、地味すぎて目に留めるお客さんはまずいないだろうに。
扉を引くと、ゆるめのTシャツを着て肩をほんのり強調し、黒いズボンをはいた人が立っていた。
この紫色で縫い目があちこちにある肌と、
過剰なほど相手を気遣うような上目遣いには覚えがある。

「あ～。図書館の受付さん」
「え？う……ごめ……こ、んにち…わ」

途中でごめんと言いかけたのは私が眉間に皺を寄せてしまったからだろうか。
もしそうだったら申し訳ないので顔を揉みほぐす。それからにかっと笑って見せた。

「ども。よくここが分かりましたね？」
「…う、ん。その本……のしおり、に…呪(まじな)い…かけ、た……の」
「え、なぜに？」
「ん……あ、の…また…会い、た、くて…」

可愛らしく笑いながらプライベートの侵害を暴露する受付さん。
良かった～。トイレであの本読まんくて。さすがにそれがバレたら恥ずかしい。
しっかし私なんかの居場所を調べてなにが面白いんだろうなぁ。

私の背中は甘い樹液なんか付いてませんよぃ？
取り合えず立ち話もなんなので、部屋に通して椅子に座らせた。
もじもじきょろきょろと落ち着かない様子なのでホットミルクを出した。

「おいし、い」
「お砂糖足しますか？」
「あ……じゃ…あ、の……も、少し」
「はいはい」
「あ、あり…が、と」
「さて、何します？娯楽道具ならなんでも揃ってますぜ旦那」
「……あ、うん…あの……あ、のさ」

紫色の頬がほんのり赤くなる。一応体温があるのか。

「腕を……俺、の…腕…縫って、くれ……ない？」
「良いですよ」

間髪入れずに返事をすると、受付さんはちょっと驚いた顔をした後、今にも周りにお花が
咲きそうな笑顔になった。まさにぶわぁあ！って感じである。
受付さんは自分専用らしきソーイングセットをポケットから取り出すと、私に差し出した。
それで縫えということらしい。
私は医者じゃ無いので人体の縫合経験などないのだが、大丈夫なのだろうか。
受け取ろうと手を伸ばしたら、その手を掴まれた。
にこにこ顔の受付さんにベットまで引っ張られる。
それから丁寧な仕草でベットに座らされ、受付さんは私の目の前に座った。

「ここ…ん、とこ……縫って？」
「りょーかいです。けど、痛くないんですか？」
「大、丈夫。……いつ…も、縫って…る……から」
「そーですか？でも痛かったら言って下さいよ」
「ん…うん……言う。ちゃん、と」

おそらく嬉しさからくる控えめな笑い声が相手から漏れる。超が付くご機嫌模様だ。
何故かやたらと懐(なつ)かれている気がする……

「名前……あの…教え、て……って…言った…ら、困る？」

と思っていた矢先にこれである。
もしかして受付さんはウーパールーパーかサンショウウオがお好きなのだろうか。
人間の世界に居た頃「お前ウーパーとサンショウウオ足して2で割ったみたいな奴だな」
と友人の間でなかなか私は好評だったのである。そっち趣味なら成る程と頷ける。

「あー…と。岸本と申します」
「……下、の……な、まえ…は？」

やっぱりそうきたか。寂しそうに俯かれても教えることは出来ないのでどうしようもない。
「企業秘密です」と苦笑いに答えるとますます深く下を向く受付さん。
その体勢だと非常に腕が縫いにくい。
苦し紛れに「受付さんのお名前は？」と聞き返す。

「……ルイン…」
「ルインさん。あのですね、もちっと腕上げてもらえません？」
「……う、ん。……ねぇ」
「はい？」
「…ハサミ……は、使わ…ない、で…歯で……糸、切っ…て？」

あいよ任せな！とばかりに言われたとおり歯で糸をプツリと切る。
それを見て満足そうな受付さんは私の頭に擦り寄ってきた。
まさかの求愛（？）行動にどう応えたら良いのか分からず、肩をぽんぽんと叩いて返す。
濃紺色の髪が額をくすぐるので痒くてたまらないのだけれど、両手共に受付さんに握られて
しまったので掻くに掻けない。むぅん。かゆい。
暫(しばら)くなすがままになっていたら、いきなりどんと大きな音がしたので
「うお」といつもより野太い声が出てしまった。
音がした扉の方を向くと美人さんが蔑むような目をして佇(たたず)んでいた。

「交代」

それを聞いて時計を見るが、まだ２０分ほどある。
いくら１０分前行動が礼儀正しく理想的とはいえ、これは少々早すぎる。

「美人さん、今日予約なんて入れて…」
「インフレイム」
「あ、ああはいはい。インフレイムさん。まだちょっと早いですよ時間」
「…い、良い…よ……キシモト…俺、もう……帰る…から」

言いながら、受付さんは自分のソーイングセットを片付けてまたポケットにしまう。
寂しそうな顔でばいばい、と残して足早に立ち去ってしまった。
――もう来ないだろうなぁ。
ぼんやりと受付さんの去っていく後姿を見ながら思った。
そしてさっきから痒かった部分をポリポリ掻く。

「インフレイムさん。今日は愛美(まなみ)？さんだったかのとこに行くんじゃなかったんですか」

そうでなくとも出入り口の紹介文と扉の前に”指名中”の札が貼られるのだから、
接客の最中なのは分かるだろうに。
ちゃんと目を通さなかったのだろうか。悪い子だなぁ美人さんは。
めっ！

「助けてやったんだろうが。ありがとうも言えないのかお前。死ね」
「何一つ助かっておらんのですが…」
「さっきのは人間を堕(お)とすのが得意な奴で、あいつに絆(ほだ)されると体が腐り落ちて死ぬんだけど？
良かったなぁ？俺が途中で来てくれて。お前超キモい顔で鼻の下伸ばしてたもんなぁ。
むしろ放って置いたほうが良かったとか言うわけ？」

不機嫌そうにがたんと音を立てて美人さんが椅子に座る。
それから行儀悪く足をテーブルの上に置くと、こちらを睨み付けて
「コーヒー」と一言呟いた。

08　××安定剤

――しいたけ食べたい。
日本人生まれの方々なら大半はこの気持ちを分かって頂けるだろう。
美形の人は人並みに大好きなんだけれども、でもこうも美形しか居ないとなると結構きつい。
娼婦さんたちも美人さんが圧倒的に多いので、右見ても左見ても……状態だ。
連日連夜フランス料理フルコースを食べているようなものでそろそろ胃もたれしそうである。
キャベジンが必要だろうか。胃に優しく効きますよキャベジン。
高級食材はもういいんです。煮物が、納豆が、アジの開きが、食べたい。
そっと祈るように胸元で両手を合わし祈る。
ひとしきり瞑想した後、食堂へ向かうべく部屋を出た。

「話があるんだけど」

廊下を歩いている途中、女性特有の、しかし少し低めな声に呼び止められる。
それに応じてそろっとその声の方を向いて

「ちぃっ！！」

盛大に舌打ちした。
そこにはつり目なセミロングかわい子ちゃんが居たからである。
茶色に染められた髪。運動部所属なのであろうと容易に想像できる

引き締まった身体。
しかしバストは人並み程の大きさが有り全体的にバランスが良い。
身長は１７０前後くらい。
言葉と見た目からして十中八九日本人だ。年齢は私よりも３、４歳年下だろうか。
……まーたキャビアだった、と軽く肩を落とす。
キャビアちゃんは私の舌打ちをどう取ったのか「上等じゃん」と吐き捨てる。

「ここじゃなんだから、あたしの部屋で話つけるよ」
「ははは。いや無理ですよ」
「何が無理なわけ？さっさと付いて来なよ」
「いやいや無理。むりむりむりむりむりむり」
「そこまで？！」
「むりったら無理マジ無理本当無理結局無理存外無理何がなんでも無理」
「無理無理うっせぇぇえ！」
「今日ミルククレープなんですよ？食べ逃したくありませんね！」
「しかも食いモンのためか！！あたしの話よりクレープが大事かよ！！」

そんな「仕事とあたしどっちが大事なの？！」みたいなこと言われましてもなぁ。
初対面という壁もなんのその超絶ツッコミをかましてくるキャビアちゃんは、
なんだかんだで食堂で朝食に付き合ってくれた。
途中「ここんちの蕎麦って美味いよね」「もはや匠の技ですな！」
などと親しげな会話を
交わしたりして、ちょっとほのぼのな空気が流れた。
そしてごちそうさまをした後、キャビアちゃんの部屋まで案内され

た。
初期装備である西洋の魔女みたいな装飾は全て可愛い物グッズと交換してあった。
水玉のカーペットにハートのクッション。クマ柄のベットとガラス作りのテーブル。
ぬいぐるみもいくつか置いてある。

「これ可愛いくない？」

黒いブタさんのぬいぐるみを手に取りこちらを振り返るキャビアちゃん。
その愛らしさに「こらこら～お持ち帰りしちゃうゾ☆バキューン☆」
てやろうとしたが
それを行動に移したら鳩尾に一発（いや三発くらい？）くらいそうなのでやめて置いた。

「そんでキャビアちゃん。お話というのは？」
「ん？んん、まぁそこに座っ……今あたしのことキャビアって言ったかおい。おい！」
「煮ても焼いても美味しいキャビア～」
「なんの歌？！」

なんという打てば響くリアクション。爽快なまでの鋭いツッコミ。
もうこれはあれですね。コンビ組むしかないっすね。ぐふ。
突然「一緒にショートコントやらない？」って誘ったら怒るだろうか。
そんな私の思惑を他所に、キャビアちゃんは私をテーブルの前に座らせポカリを淹れてくれた。

「……あの人ともう会わないで」

真正面で向かい合う私に重低音で告げる。
テーブルに置かれているキャビアちゃんの手が震えているような気がした。

「あの人とは？」
「ふざけんな！お前が分かんないわけ無いだろ！あの人だよ！！」
「名前をいっちゃいけないあの人的な？」
「違げぇぇぇえ！！インフレイムのことだ！！」
「あ～…そっちの。……いや、ん？インフレイムさん？」

成る程。この子が美人さんお気に入りの愛美（まなみ）さんか。
いつも私を指名しては他の娼婦たちの文句を言っていた美人さんの顔が浮かぶ。
バーニスは喋りすぎてウザいとかヘリョンはすぐ泣くだとか色々言っていたが、
愛美さんに関しては「あいつ結構可愛い」「今日はお前よりも愛美な気分」など、
良い印象の話しかインフレイムさんの口から聞いたことは無い。
しっかし見事にインフレイムさんにかどわかされちゃってますなぁ。

「会うなと言われましても仕事ですし。しかもあちらさんから指名されてる訳で…」
「はっ。なにその言い方？超余裕じゃん」
「いやいやいや、余裕とかではなくてですね」
「あんた自分が可愛いとか思ってんの？鏡見てみたら？」
「毎日見てますよぅ失礼な。朝の洗顔は乙女の常識ですからね」
「ふざけんな！あんたあたしを馬鹿にしてんでしょ？！」
「してませんって。むしろ可愛いなぁと……」
「なにその上から目線？キモいこと言うなブサイク！」

こういった場合、なんと言えば相手は引いてくれるのだろうか。
この世に生を受け苦節２０年。まさか私が男を取り合うような状況下に直面しようとは。
ちょっとこそばゆいような体験を噛み締めつつ、ふとした疑念が頭を過ぎる。

「インフレイムさんに名前教えること、店長に許可貰ったんですよね？」

聞いた途端、立場が逆転した。
問い詰める立場から一転、問い詰められる側の雰囲気を纏いだしたキャビアちゃんは
視線が思いっきり左側へと流れていた。許可は貰っていないらしい。
ラミア店長はくれぐれも、と念押しして下の名前を教えることを注意していた。
きっとなにか理由があってのことだろうに、目の前の青春真っ盛り爆走反抗期な年頃の
キャビアちゃんには、恋愛での弊害にしか感じなかったのだろう。

「キャビアちゃん、相手はお客様なん…」
「うるさい！！」

バシャ、と手元にあったポカリスエット入りのコップを投げつけられた。
じんわりと染み込んだ後、髪からぽたぽたと水滴を作った。
少し額がひりひりする。
ごめんと小さな声が聞こえてきた。ほぼ反射的な謝罪だったのだろう。
キャビアちゃんは泣きそうな表情になっていた。

「インフレイムとあたしは、営業なんかじゃない」
「それ本人に聞いたんですかね？あの人、他の人の所へも結構通ってますよ」
「やめてよ！そんなんじゃないもん！！」
「いや、そんなんじゃないっていうか…」
「うっさい！ウソ言うな馬鹿！ブス女！！死ね！！」

堪えきれず嗚咽を漏らす。ガラステーブルに少しずつ涙が落ちていった。
困った。どうしよう。この子泣き顔もかわゆい。頭なでなでしながら飴をあげたい。
やりきれないのか、近くにあるクッションやらぬいぐるみやらを投げつけてくる。
コアラのぬいぐるみが顔面を直撃し「おぶ」っと乙女らしからぬ声が漏れた。
その声を聞いてキャビアちゃんの肩がびくりと跳ねる。

「どうせ……どうせあたしなんて…こんな、エゴの……固まりみたいな…違っ……
　あたしより、あんたの方が…あの人、は……」

泣いてしまったことで、呂律と思考に混乱が生じたらしい。
たどたどしく、少々分かりづらい文法をぽそぽそ呟きだした。

「おバカだなぁ。女の子のそういう可愛いのは、エゴじゃなくてヤキモチって言うんですよ」

タオル借りますよ、と断って頭にかかったポカリスエットを拭く。
キャビアちゃんは何を言われたのかいまいち理解できない様子で、

流れる涙もそのままに
こちらをじっと見ていた。
その涙のせいで彼女の服も私のと同じくらい濡れていた。

「大体相手は悪魔なんだから、むしろエゴイストの方がモテるかも知れませんよ」

私は敵じゃありませんからね～とばかりにかっと笑って見せる。
キャビアちゃんは鼻を一回すすって、目を乱暴にごしごし擦りだした。
それにぎょっとして、私は今まで自分を拭いていたタオルを無意識にキャビアちゃんの顔に
押し付けた。女の子なのに目が真っ赤になったら大変だ。
最初の勢いが無くなってしまった、しおらしい彼女は抵抗せずそれを受け入れた。
ある程度拭いてから今使っているタオルがポカリを拭いた後の物だと気付き、しまったと思う。

「おおぅ、すいません。逆にべたべたに」

謝罪している途中で腕の辺りの服を掴まれた。
そしてキャビアちゃんの目からまた涙がにじむ。
ふんわりポカリスエットの匂いがした。

「友達に、なって」

俯きながら囁くように零れた言葉は予想外すぎて、しばらく返答ができなかった。

09　似通った致命傷

先日インフレイムさんはキャビアちゃんの部屋に入る途中、
何を思ったのかいきなり踵(きびす)を返しの別の部屋に駆け込んでいったという。
そしてその部屋がいわずもがな私の仕事部屋である。
その話をキャビアちゃんから聞いて、「受付さんの接客途中に乱入してきたアレか」
とすぐ合点がいった。
キャビアちゃんが私の所在を知り、ここまでの行動に駆り立てた原因はその一件から
と言われて、美人さんの評価が自分の中で「女泣かせ」に決定した。

「…泣きすぎて喉かわいた」
「んじゃあ部屋行ったらなんか出しますよ」
「炭酸系が良い」
「はいはい」

あの後部屋を掃除し、さて自室に帰ろうとしたところでキャビアちゃんが付いてきた。
最初は混乱したがあんなことがあった後女の子を一人残していくのも宜しくないので
結局私の部屋に一緒に行くことにした。
ちょこちょこと私の服のすそを掴みながら付いてくるキャビアちゃんは、さながら
甘えんぼのわんわんのようで、私の頭には花が咲いていた。
私たちの部屋は1階と2階でそれなりに離れていた。

階段を降り、もさもさの赤いジュータンのひかれた廊下を歩いていくと、私の部屋の前に
デジャヴを感じる紫色が見えて立ち止まる。

「受付さん……？」

その言葉を合図にしたように、下を向いていた受付さんの顔がおそるおそる上がる。
手には何故か花束が握られていた。

「…キシモト……あ、の…俺……また…会っ…おれ、でも…」

掠れた声に、徐々に嗚咽が混じっていく。
要は会いに来てくれたらしい事は分かった。あんな半ば追い返されるような形で別れたのに
また来てくれたことは素直に嬉しい。
けど、今はキャビアちゃんも居るし……。
ちらりとキャビアちゃんの方を見ると、彼女の目にもまた涙が溜まっていた。
受付さんに触発されたらしい。
心の中でＮＯォ…ＮＯォォォオオ！と叫び声を上げた。
あわてて部屋の扉を開け、二人を中へ通し椅子に座らせる。
花束は花瓶が無かったので、細長いグラスを代用してテーブルに置いた。

「俺……好きな…人、とは…ずっ、と……一緒に…居たい、から…だから…両、想い…に
……なった、ら…お、俺と…同じ…リビング、デッドに、する……ん、だけど……けど、
みんな…そうする、と……泣かれて、怒って……俺から…離れて

……行く……ん、だもん。
…でも…キシモト、なら……最初…会った、時…から、優しかった、から…だから……」
ずっと一緒に居てくれると思って、と消え入りそうな声で最後を締めくくる。

「分かってたの。インフレイムって、すごいイケメンだし…私だけじゃなくて、他の人も
指名してたっておかしくないもんね。でも、でもさ……あんな優しくされたらさ、
もしかしてって思うじゃん、普通。だけどどうせ騙すんなら
もっと上手く騙せよって感じ。何も言わずにアンタんとこ走っていくとか、もー最悪」

出されたコーラを飲みながら吐き捨てるキャビアちゃん。
それを聞いて、なぜか受付さんが眉間に皺を寄せキャビアちゃんを睨み付ける。

「俺が……今、しゃべ…って、ん…だけど?」
「は?それが何?大体、こいつと先に一緒に居たのあたしじゃん。後から来てさ、
勝手に入ってきて何言ってんの?」
「……俺の…は…昨日、から…の、話し…だも、ん……」
「てかさっきから気になってたんだけど、その話し方遅すぎてイラつく」
「…君、だって……ペラペラ…しゃべ、る……から…聞き、取り……づらい」
「そんなんアンタだって一緒じゃん?大体、」
「お二人さんや〜い」

声をかけると何？と言わんばかりの二人の視線が私に向けられる。
その目はもう乾いていたのでほっとする。
正直私が泣かされる分には「よっしゃバッチ来いやぁぁあ！むしろ生ぬるいわ！！」くらいの
心持ちでいられるのだが、相手を泣かせる趣味は無いので涙を流されたりすると居心地が悪い。
よきかなよきかな、と己の心に収束をつけ二人に笑いかける。

「トランプしません？」

言った途端キャビアちゃんから「空気読めバカ」と怒られ受付さんには控えめに笑われた。
それをＯＫの合図と勝手に受け取りトランプを棚から出し、カードを切る。
最初はやはり王道のババヌキが良いだろうか。それとも貧民のほうが盛り上がるだろうか。

「きっとそーいう間抜けな感じが、インフレイムに好かれるんだろうなぁ」

しみじみと言うキャビアちゃんに私はすかさず首を横に振った。

「言い忘れてましたけど、インフレイムさん、キャビアちゃんのこと超気に入ってますよ？
　他の娼婦さんたちの悪口は聞いても、キャビアちゃんの愚痴は聞いたことありませんもんよ」
「……なにそれノロケ？」

他の人の愚痴を良く聞く＝それだけ頻繁に指名されてると受け取ら

れたらしい。
確かにその通りだけれども、今気にして欲しいのはそこじゃ無いんですよ…。
恋する乙女のフィルターは随分厄介だ。
どこまでも勘違いしやすく盲目的になるのに、変な所で鋭くなる。

「本人、に…直せ、つ…聞け…ば……良い、のに」
「……そんなん出来たら、とっくにしてる」
「いやいやキャビアちゃん。その方が効率良いと思いますよ？」
「無理。怖いじゃん。ヤダ」
「……チキ、ン…」
「はぁ？！アンタに言われたく無いんだけど？好きな女子ゾンビにするとかふざけてんの？
そんなんする位だったら魔界（こっち）側来て貰えば良いじゃんか」

キャビアちゃんの言葉にそりゃそうだ、と同意する。
ラミア店長が、魔界に居る間は人間は歳を取らないと最初に教えてくれたことを思い出す。

「…だっ、て……人間…の子を……魔界、に…なんて、連れて……来たら、かわい…そう」

受付さんは気遣いが別の方向で働いていたらしい。
私は持ち札をそれぞれに配り終えてから苦笑気味に言った。

「受付さん、女としては身体が腐るより魔界に引越ししたほうがマシですよぉ」
「だよねぇ。こいつ考え方が浅すぎね？」
「…そ、なの……？」
「多分そっちなら、みなさん喜んで一緒に居たと思いますけども」

「…そ、っか……そうか、ぁ…」

照れたように受付さんは「頑張、る……ね？」と私に笑いかける。
恋愛経験の多くない私にも分かるくらいに露骨なその態度にまんざらでもない気分にもなるが、
相手が悪魔さんなだけに困る事柄の方が多そうで自然と目線が泳ぐ。
横からキャビアさんの「ごめん」が聞こえてきたので、受付さんの視線の意味が私の勘違いではないことが判明してしまった。

…まぁいいや。とにかくトランプをしよう。

１０　同時多発※

「え～とですね。昨日、愛美さんに会ったんですよ」

いつものように私を指名してくれた美人さんと向かい合わせで床に座りながら、
今日はジェンガで遊んでいた。
ジェンガの一部分を引き抜く途中の美人さんの手が一瞬止まる。

「へぇ、で？」
「インフレイムに会うなと言われました」
「なに、そんな可愛いこと言ったのあいつ」
「ええ、可愛かったですよ」
「お前に聞いてねぇし。ほら次、さっさとやれよ」

ジェンガ順番を促されて、左右のバランスを確認しつつ狙う場所を決め、引き抜く。
少し揺れてしまったのにはひやりとしたが大丈夫そうだ。
なぜこんな修羅場のような話しをしようとしてる中でジェンガという神経をすり減らすための
遊びをしているのだろうか。チョイスを間違ってしまった。
こんな気まずい雰囲気は中２の修学旅行中、他人のパンツを廊下で拾ってしまったとき以来だ。

「それで、ですね。もう私を指名しないで頂きたいんですが……」
「…なにお前、妬いてんの？」

ふんと鼻で笑う美人さんの顔はとても楽しそうだった。
その表情がとても格好良かったので私はしいたけが食べたくなり、胃の辺りをさすった。

「愛美と一緒にお前もキープしといてやる。心配すんな」

珍しく私に優しく接してくれた美人さん。しかし言葉の内容が内容なだけに首をひねる。
今のは二股宣言なんだろうか。さすが美形。
まぁ相手は魔界の住人さんな訳だし、もしかしたら可笑しい事じゃないのかもしれない。
しかしそれではキャビアちゃんに申し訳が立たない。

「いやぁ、出来れば私はご遠慮したいです」

なぜ私はこんなド美人さんを振ろうとしてるんだろうか。
慣れぬ状況にお尻がかゆくなる。
ガシャ、という音と共にジェンガが崩れた。
美人さんが倒したらしいそれを凝視しながら、顔を上げることが出来ない自分を自覚する。
人に嫌われる瞬間ってのは何歳になってもきついもんだ。

「お前のくせに、俺に好かれるの嫌だとかぬかすわけ？」
「はぁ……要約すると、そうなりますな」
「じゃあもう生きてる価値無いじゃん」
「まぁ存在価値への見解は人それぞれかと…」
「他に言うことは？無いなら死ね」

ジリリ、と電話の鳴き声が突然部屋に響き、身体が硬直する。
美人さんはそんな音など知ったことかと言わんばかりに私を睨み付

けていた。
部屋に備え付けの電話があるが、こちらから使うことはあってもかかって来る事はまず無い。
娼婦の予約はラミア店長が管理しているので本人に直にかける必要がないからだ。
なので余程の緊急性がない限り電話のベルが鳴ることは有り得ない。
ちょっとすみません、と美人さんに断り慌てて受話器を取った。

「はい、岸本……」
『ごめんね接客中に。悪いお知らせがあるの』
「店長、勘弁して下さい…。ただでさえ重苦しい雰囲気なのに」
『大丈夫。考えようによっては救いようのある話だから』
「なんですか？今美人さんがいらっしゃるので手短にし、いっ、た？！」

鋭い痛みを脇腹に感じてそこを見ると、美人さんの爪が喰い込んでいた。
反射的に振り返ろうとしたがそれは叶わなかった。
美人さんが近くに居すぎて身体が回せなかったからだ。
次に肩に痛みが走る。どうやら服越しに噛まれたらしい。がり、と特有の音がした。

「　　」

小さな声で何か囁いた後、美人さんはさっさと部屋を出て行く。
乱暴に叩きつけられた扉はギィ、と鈍い悲鳴を上げ半開きになっていた。

「ちょっと！あの、美人さん！あの……っ」
『どうかした？』

「すみません後でかけ直しますんで、今は…」
『分かった。早めにお願いね』

受話器を置いて私も部屋を出る。
追いかけて何がどうなるという訳でもないが、今の別れ方はあまりに中途半端だ。
せめてばっさり切るか切られるかしたい。
廊下を突っ切って出入り口である門の前に来ると、不自然な人だかりが出来ていた。
そこの美人さんの見慣れた茶髪を見かけ人ごみを掻き分ける。

――が、そこで思わず立ち止まってしまった。
娼婦の紹介が張り出されているボードの所に、大きなサソリのような後姿があったからだ。
固そうな薄紫の甲羅に覆われた身体に大きなハサミ。
顔の部分だけは人間の男性のものだが、口が蟻(あり)の口と同じような形状だった。
そのグロテスクな様相にこの人だかりが意味するところを知る。
美人さんは、今からすぐ行けば追いつくだろうけれど、

（まぁ、でもなぁ…）

得体の知れない客を相手する人たちの恐怖も、
せっかくこの店へ来てくれたお客様をこんな妙な雰囲気の中に放って置くのも、
どちらも気が引けるし、宜しくない。
人間が幸せに生きていくための方法は3つある。
?.人に優しくあること
?.人に優しくあること
?.人に優しくあること

どこで聞いたか教わったのかもう忘れてしまったが、今ではこれが私のアイデンティティだ。
気を落ち着けるために小さく息を吐いて、サソリさんに近づく。

「誰かお目当ての子でもいるんですか？」

話しかけると、ゆっくりサソリさんはこちらを向いた。
ギチギチと口の辺りから音がする。
周りから小さな悲鳴がいくつか聞こえた。

「いやぁ、こーゆーとこ初めてなんすわぁ。どう選べば良いんかねぇ」

予想していたより、というよりも完全予想外な軽い口調にしばし唖然とする。
次第に変な嬉しさが込み上げ、「ぐふ」と笑い声が漏れた。
確かにグロい見た目であるが笑顔が柔らかくて印象が良い。
少しクセのある金髪も、なかなかに可愛らしく見えてきた。

「どんな感じの女子がお好みですかね、お客さん」
「そーね。ま、俺の話聞いてくれる子だったら誰でもってゆーか」
「じゃ私とかどーです？地味めですが、良い仕事しまっせ」
「そう？マジで？じゃあ俺の相手してくれる？可愛いおじょーさん」
「やだ紳士！私で良ければ何時間でもご一緒しますよぅ」

周りが、さっきとは別の意味で騒がしくなる。
私は自分の部屋へサソリさんを案内すべく、行く方向を指差しながら歩き出した。
美人さんのことは「さてどーしたものか」のままだが、明瞭な解決策があるわけでもない。

それにちょっと時間を置いたせいなのか、
今なら逆にあの別れ方の方が私が悪役っぽくて、良い終わり方かもしれないと思えてくる。
男女交際経験値が少ない私の意見なのでいまいち不安が残るが。

「俺の尻尾には触んなよ？毒があるからさぁ」
「了解でっす」
「他んとこは撫で回しても大丈夫。むしろハサミは俺のチャームポイントなんでお勧め」
「まじっすか。じゃ遠慮なく……ちぇりゃ！」

勢いよくがっさがさ撫でるとくすぐったいのか、サソリさんが楽しそうに笑う。
ごつごつした甲羅の感触を味わいつつ、キャビアちゃんには今日のことを報告すべきかどうか
ぼんやり考えた。

１１　それが迂闊なのだと

「私は早めにお願いって言ったはずだけど？あなたの早く、は４時間後なわけ？
これだけ待たせちゃったらもう断るに断れないじゃない。どうするの？
相手は魔界のお貴族様なのよ？私程度の魔族じゃ助けに行くどころか返り討ちにされる、
って言うより相手の領地にさえ入れて貰えないし、いつも外出の時に貸してるお守りなんて
してったら逆鱗に触れて即処刑されるわよ。どうやって身を守るつもり？」

ムカデさんの背に乗りながら移動している途中、ラミア店長の説教を頭の中で反芻する。
先日店長から電話があり、後でかけ直すと約束したのに
サソリさんとのプロレスごっこに白熱するあまり折り返し連絡するのをすっかり忘れていた。
そのため先方の予約を断れなくなってしまったらしい。
しかもお客様のお宅へ娼婦のほうが向かう、いわゆる出張サービスをご希望されたらしく
余計にラミア店長は渋っていた。

約一時間ほどの説教の後はひたすらテーブルマナー、礼儀作法を教え込まれた。
さらにはエリートな悪魔は、自分の力の強さを誇示するために魔族が苦手とする銀でできた物を

わざと傍に置く傾向があるので、いざとなったらそれで撃退しろとまで仰せつかった。
途中で幾度となく「お、おかっちゃん！」と抱きつきそうになるのを堪えるのが大変だった。

「……着いたぞ」

ムカデさんの合図に顔を上げると、大きな門がまず目に入る。門番は居ない。
中世ヨーロッパを思わせるそのお城は、芸術的なはずなのにどこか不気味で、
今にもラスボスとかが出て来そうだ。
ちなみに私の装備品は皮の服とひのきの棒レベル。新手の自殺か。
ムカデさんから降りてから自分の服にほこりやゴミが付いていないかチェックする。
これもラミア店長から注意しろと言われたことだった。

「ここで待っててやる」
「いやいや、何時間居るか分かりませんし」
「何かあったとき、叫び声が聞こえる場所に俺が居れば都合が良いだろうが」
「何かあったときの叫び声って……それもう断末魔と違います？」
「それくらい警戒しろってことだ」

ぬぅん。おとっつぁんめ。
この心配性2号さんをどう言いくるめたものかと悩んでいたら、門がゆっくり開きだした。
ギギギ、と鉄がすれるような音がする。
それと同時に中から灰色の手が歩いて出てきた。
いや歩いて、というのは御幣があるかもしれない。なにせ指を使っ

て移動しているのだから。
手首から先をちょん切ったような形状のそのお方は、私の前まで来ると人差し指と中指で
おじぎのような仕草をした。それに釣られて私も頭を下げる。
次にちょいちょい、と人差し指だけでこっちへ来いの合図をする。
どうやら案内してくれるらしい。

「ムカデさん、帰るときになったらちゃんと連絡しますんで」

先帰ってて下さいよと念を押してから先に進み始めたハンドさんに付いて行く。
私が入った途端、また門が閉じる。
お城の中は薄暗く、広い廊下の壁に一定の間隔でロウソクが灯っていた。
中央には赤紫のジュータンがひかれている。
とんとん、と足を軽く叩かれたので、ハンドさんの身長（？）に合わすようにその場に
しゃがみ込む。すると今度は手を引っ張られたので、ハンドさんのなすがままに差し出した。
その差し出した手のひらに、ハンドさんが指で何か書き始める。

「ん？く・ら・り……いや、い？…か・ら……」

”くらいからきをつけろ”。

「あ、これはこれは。ご丁寧にどうも～」

お礼を言うと、ハンドさんは満足したようにさっさか歩き出した。
後を追うと、長い廊下の節々に絵が飾られているのに気付く。

「高そうな絵ですね～」

特に返事などは期待せずに呟いたのだが、ハンドさんは律儀にも壁にあったロウソクを
一本取り外して、私が見ていた絵を照らしてくれた。
その明かりではっきりと見えたそれは、百舌鳥の早贄人間バージョンみたいな絵だった。
他にも転んでしまった私が怪我をしないように下敷きになってくれたり、
靴に付いていたゴミを払ってくれたりと、恐るべきジェントルマンぶりを披露してくれた。
しばらくして、大きなダークグリーンの仰々しい扉の前でハンドさんが立ち止まる。
先程のように靴を指で軽く叩かれたので、しゃがみ込み手の平を差し出す。

”このへや”
「あぁ、ここなんですか」
”おじょうさまにそそうのないように”
「はいはい。精一杯気を付けます。案内して下さってありがとうございました」
”それがしごと”
「ええ。丁寧で良い仕事してましたよ」
”ほめてもなにもでない”
「ぬぅん。つれないですなぁ」

どうやらハンドさんは仕事に誠実な性格らしい。
その実直さに表情が緩む。

「うちの使用人にまで媚を売るなんて、随分と見境がないのね」

声のした方を向くと、いつのまにか開いていた扉の傍に女の子が立っていた。
大体１０〜１２歳くらいの歳だろうか。綺麗な金の髪をポニーテールにしている。
薄灰色の瞳と、少し丸みを帯びた頬がとても可愛らしい。
ハンドさんは丁寧なおじぎの仕草を指でしたあと、そのままどこかへ行ってしまった。
その態度を見る限り、この人がこのお城の主なのだろう。
薄ピンクのフリルの付いたドレスに、耳や胸元に光っている装飾品がとても高級そうだった。

「えーと……お初にお目にかかります。岸本と申します。この度は私のようなぐぶらっ？！」

挨拶の途中で変な叫び声が入ってしまったのは、初対面であるはずのその少女から
腹部に体重の乗った膝蹴りを喰らったからだ。
咳と吐き気が同時に押し寄せたせいか、喉から変な音がする。

「ちょっと、床は汚さないでよ」

四つん這いのまま咳き込んでいる私を横目に彼女は顔をしかめた。

12　脅迫※

広い石造りの部屋には食事用らしき長テーブルと、それに合わせて並べられた椅子。
その他は暖炉くらいしかなかった。高い天井の真ん中にはシャンデリアが吊るされている。

「へぶっ」

その部屋にばつーんという豪快な音と共に私の間抜けな声が部屋に響く。
お腹の次は頬に攻撃された。
その勢いで倒れかかった私を肩を掴んで支えるポニーテールちゃん。
指が爪ごと肩に喰い込むのが分かる。

「時間はたっぷりあるもの。楽しんでってちょうだい」
「あったったったいいったったった」
「門の前に誰か待機させているようだけど、無駄よ。この城は侵入不可能で…」
「くぅ〜つつ！痛っ、あばばばばば」
「……ちょっと、もう少し緊迫感のある声出せないの？」
「え〜…緊迫感ですか？……あわわおぉ〜〜んぎゃわおぉ〜ん！」
「遠吠えか！！」

ずびし、と頭にポニーテールちゃんのチョップが振り下ろされる。

「……アリアがあなたを、どんな用件でここに呼んだと思う？」

私を床に放り投げ、気を取り直したように言い放つ。
アリア？誰の名前だろう。それとも彼女の一人称なんだろうか。
頬の痛みがおさまってきた頃、いつまでも寝転がってるような体勢では失礼なのではと
思い至り、床の上に正座して身構えた。
そこで正座している体勢の私とポニーテールちゃんの身長がさほど変わらない事に気付く。

「もしかして、ＳＭプレイをご所望で？」
「んなわけないでしょ馬鹿！」
「いやぁでもその見た目でそのご趣味とは、なかなかギャップがきついですね」
「だから違うっていうのに！」
「ぐふ。ご謙遜なさらず。かく言う私もＭ性質でして軽い痛みは案外気持ち良いなーと最近…」
「黙りなさい！それ以上掘り下げなくて良いから！！」

怒鳴った後、はっとしたように両手で口を隠すポニーテールちゃん。
こんな大声を出すなんてはしたないわ、アリアったら。と小さく呟いた。
やっぱりこの子の名前はアリアで合っているらしい。
それでさっきの質問の答えは、と言おうとした所で背後から大きなノックの音がした。
いやノックというよりは扉を殴りつけているに等しい音だった。
ポニーテールちゃんが「お兄様？」と声を出したのを合図に扉が開いく。

「……アリア。騒がしいんだが、何をしているんだ」

ぬっと大きな人が入ってくる。
身長は１９０、くらいか。
浅黒い肌に短い銀髪。なぜか口の辺りを包帯でぐるぐる巻きにして隠している。
目の色はポニーテールちゃんと一緒で薄い灰色だった。
強面だが整った顔。服の上からでも分かる鍛えられた体。
だが何故か紺色ジャージを来ていた。ポニーテールちゃんの服とは対極に位置するであろうその
服装に疑問符が頭に浮かぶ。
紺ジャージさんはこちらを一瞥すると嫌なものを見たという感じですぐ目を背ける。

「……誰だ…この年増は」

包帯を巻いてある口に手をやり、げっそりとした様子で吐き捨てる。

「お兄様にしてみれば皆年増でしょう」
「……皆、じゃないぞ。お前や、１６歳以下の姿をしている娘は俺の範疇だ」
「気持ち悪いのでそれ以上喋らないで下さいません？」
「そう言うな……俺の愛しい妹」
「だからそれが気持ち悪いって言ってるのよ！！」

そうよ、大体お兄様が、こいつが、このアホが！
と何かがヒートアップしていくポニーテールちゃん。
慣れない正座で足がしびれ始めていた私は、時々体勢を変えつつ聞いていたがどうやら
ポニーテールちゃんの１０～１２歳の姿は紺ジャージ兄さんのせいらしい。
紺ジャージさんはいわゆるロリコンらしく、妹が人間の姿になるた

めの修行中に
あれやこれや吹き込み、さらにはそれやこれな罠を仕掛けられ現在の幼女姿に至るそうだ。

「こんな子供の姿じゃ誰も振り向いてくれないんだもの！密かに狙ってたテンペランス様や
インフレイム様やロアー様だって、こんな女に取られちゃうし！！」

ん？テンペランスってムカデさんの事かね？
インフレイムさんは美人さん？
もしかしてこのことで私は呼ばれたのだろうか。でもロアーって誰だろう。

「私は取ってませんよぉ？テンペランスさんは他に好きな人が居るし、インフレイムさんには
この間こっぴどく振られました。ロアーさんとやらは存じ上げませんけど」
「……え？」
「アリアさんが思ってるほど、私好かれてないんですよ」

ポニーテールちゃんのご期待に添えなかったのは申し訳ないが、こればかりは自分では
どうしようもない。
あ、でもそういやムカデさん門の前で待っててくれてたんだった。
これは言わないほうが良いだろう。
固まったまま動かない彼女を慰めるように紺ジャージさんがお尻を撫でると、
ポニーテールちゃんは見事なまでのアッパーを繰り出した。

「それ本当なの？」
「ええまぁ。残念ながら」
「……お前のような賞味期限切れ女では、当然だな」
「お兄様。次ふざけたことぬかしたら、もぎ取りますわよ」
「悪かった。……黙ってる」
「そうして下さい」

ポニーテールちゃんは盛大な溜め息を吐くと、こちらを意味ありげな目でねめつける。

「門の前で待ってる人、テンペランス様ではなくて？」

おおぅ。やばい。バレてーらです。
ポニーテールちゃんは私に手を伸ばしかけて、すぐ引っ込めた。
「痛くしたんじゃ意味無いのよね」という言葉に、先程の自分の軽い痛みは案外気持ち良い、の件が効いているのだと分かった。
だがそれも束の間のことで、ポニーテールちゃんはすぐに思い直したように

「まぁいいわ。気持ちよさを感じている暇も無いほど虐めてあげる」

と不適に笑みを浮かべた。

「……待て。アリア待て。今部屋からカメラ持ってくるから、まだ始めないでくれ」
「お兄様、ぶち抜きますわよ？」
「わ、私そういったプレイは初めてなので……優しくして下さい、ね？」
「だからＳＭじゃないというのに！！あと気色悪い言い回しはやめてちょうだい！！」

「おい、年増。お前セーラー服を着ろ。あと髪を二つに結べ。そうすれば少しは見られる
　ようになるだろ。靴下は白だぞ」
「んもぅ。お客様ったらマニアックですなぁ」

会話がノってきた次の瞬間、紺ジャージさんの身体が宙に浮いた。
ポニーテールちゃんの一本背負いが綺麗に決まったからだった。
ダァン、と背骨に良い感じのダメージがありそうな音を立てて紺ジャージさんは石造りの
床に叩きつけられる。
白目を剥いた紺ジャージさんの身体は小刻みにぴくぴくと痙攣していた。

「…これで邪魔者は居なくなったわ。あなたには、洗いざらい吐いて貰うから」

手首の柔軟をし始めたポニーテールちゃん。
私生きて返して貰えるんでしょーか。

１３　私の見た秩序

初めまして。私はチェ・ジウォンと申します。
国籍は韓国です。年は１８歳。
髪は明るめの茶髪に染めてしまいましたが元は黒。今日は気合入れて髪アップにしてきました。
もうこの「魔界」とか呼ばれる場所で娼婦をして3年くらいになりますが、
なかなか成績が伸びません。
人見知りはしない方だし、顔にも接客にもそれなりに自身があったので正直ショックです。

そこで最近入ったばかりなのにやたらと指名率の高い、岸本さんとやらを参考にさせて
貰おうと思って今日・明日と二日間オフにしました。
ちなみに一ヶ月ごとに指名数を棒グラフで表したものを各階の廊下に張り出すので、
それで岸本さんのことを知りました。
娼婦が休日を欲しい場合は、出入り口と部屋の扉に休業の札をかけてラミア店長に報告する
だけなので簡単です。
休みを取りすぎると自分の首を絞めるだけなので、あまり連続しては無理ですが。
あ、そうこう考えているうちに岸本さんが食堂に入ってきました。
まさか向こうからやって来てくれるなんて好都合です。
岸本さんの斜め後ろ辺りの席へ慎重に移動します。……はい座りました。

気付かれてません。成功です。
しかしその成功を喜んでいる暇も無く、突然食堂にガシャンという音が響きました。
私はびっくりして硬直してしまいました。

「どういうつもり」

低く威嚇するような女性の声がします。
学校ではクラスの中心部にいそうな茶髪セミロングの美人が岸本さんに詰め寄ってます。
どうやらさっきのガシャンは彼女が皿の乗ったトレイを乱暴に置いた音だったようです。
しかし岸本さん、食べてます。クロワッサンから手を離す気配がまったくありません。

「ちょっと人の話を、ちょっ……食うのをやめろ――――！！」
「ふんぐぅわ、うんぐぅわ。ひふふ？」
「何言ってっか分かんね――――！！」

ダァン、と彼女は両拳を机を叩きつけました。
岸本さんはそれでも食べてます。しかもクロワッサンは終わってサラダに取りかかってます。
早食いは身体に良くないですよ。

「…あんた、インフレイムに何言ったの」

乱れた呼吸を整えながら再び質問。しかも誰かの名前が出てきました。
修羅場な予感です。
それと私、日本に留学しようとしてましたので日本語の勉強はばっ

ちりです。
この方たちのお話しは全部理解できてます。

「ん〜？もう私を指名しないで下さいと言いましたが」
「なんでそんな事言うわけ？あたしに遠慮してるつもり？！」
「いやぁ、インフレイムさんよりキャビアちゃんの方が好きってだけですよ」
「ふざけんな！そんな理由……っ、え？」
「あいらびゅーキャビアちゃん」
「二度も言わなくていいから！！」

なんかいまいち展開が掴めません。キャビアちゃんというのはあの美人な女性の名前？
いやそんな可哀相な名前付ける両親が存在するわけないので、愛称か何かでしょう。
要はインフレイム↑キャビア↑岸本↑インフレイムという図なのでしょうか。
昼ドラ真っ青などろどろシチュエーションですね。

「べ、あ、たしは……別に、あんたとインフレイムとなら…別に」

三人で付き合ってもいいのに、とごにょごにょ言い出すキャビアさん。
なんと、二股に肯定的ですと？！
気の強そうな彼女にここまで言わす岸本さんて一体どういう……。

「まぁまぁ。プライベートなお話しはまた今度しましょうよ」
「あんたがインフレイムに謝れば、すぐ済む話じゃん」
「そこらへんも兼ねて、また今度ということで。お互いお客様の予約が入ってることですし」

「……あと15分あるし」
「私は3分もありませんのですよ。残念ながら」
ね？と岸本さんはキャビアさんを納得させ、二人は食堂を出て行きました。
私もすかさず後を追います。
しっかしあの人たちの話に夢中になりすぎてクロワッサン食べ逃してしまいました。
朝食抜きでしょっぱなからハードな岸本さんのスケジュールに付いて行けるでしょうか私。
不安を抱きつつ尾行します。
階段の所で二人は別れた後、岸本さんはでっかいムカデを部屋へ迎え入れてました。
いやぁああ無理！！私、アレ系は、虫系は全然無理！！
そこも岸本さんの強みなのでしょう。私はああいった視覚的に優しくない方は出来るだけ
避けるか人型になって貰うかして凌(しの)いで来ました。
扉が閉まった瞬間、すぐさま聞き耳を立てます。
しかしごにょごにょ聞こえるだけで内容がよく分かりません。
こうなれば多少危険ですが、扉を少し開けて覗くしかありません。
大きな音を立てないように細心の注意を払い、ゆっくり開けます。
「さっさとラミア店長に告白したらどうですか、ムカデさん」
途端に爆弾発言が耳に飛び込んで来ました。
どうやらあの大ムカデのお方は店長に好意を寄せているようです。
大ムカデの口からお菓子のクズらしきものがポロポロと自由落下しています。
岸本さんはそれ見て、大ムカデの口をティッシュで拭き始めました。

「お前……いつから…」
「ムカデさんが店長を意識し始めた頃からですかねぇ」
「相当最初からだなおい」
「もう早く告って下さいよぉ。私を当て馬にするもんだから、ムカデさんを好きな方に
ボッコボコにさたんですよ。あやうく目覚めるところでした」
「……すまない。……目覚めるって、何に」
「ぐふ。聞きたいですか？」
「いや、いい」

話しが脱線してきています。なぜ店長に告白する話しからMの目覚めへ流れが行くのか…。
そしてここでトラブル発生です。
覗き見していた所を通りがかりのラミア店長に見られてしまいました。
「ちょっといらっしゃい」と首根っこ掴まれて引きずられる私。
あああ気になる。あの話の続きはどうなるんでしょうか。
そんな事を考えながら上の空で話を聞いていたら、ラミア店長をもっと怒らせてしまい
お説教3時間コースへ突入してしまいました。
話しが終わり次第、急いで岸本さんの部屋の前へ戻りましたが、
どうやらもう大ムカデの方は帰ってしまったらしく、別のお客様がいらっしゃいました。
くぅ。続きが聞きたかった。無念です。
今度のお客はでっかいサソリに人間の頭をくっつけたような方でした。
そういえば岸本さんが前に、このお客様を出入り口の前でナンパしていたのを見た気がします。

「ばっかお前、それはもう横綱とは言えないだろ」

「一人相撲とは、一人相撲とはなんなのでしょうか」
「簡単さ……恋のターニングポイントってことだ、ろ？」
「さ、サソリさぁぁあああん！！」
「おいおい、サソリさんなんてやめてくれよ。ファミリアって呼んでくれ」
「ファーミーーーン！！」
「はっはっは。ムーミンみたいな？」

……？？？
なんの会話をしているんでしょうか。というか会話になっているんでしょうか。
結局この二人の会話を最初から最後まで理解することが出来ず終い。いえそもそも人間が理解しえる内容なのかも疑わしい気がします。
2時間がまるっと無駄になったようです。
次のお客様は特に居ないらしく、岸本さんは出入り口のほうに行きました。
しばらくその辺をぶらついていたと思ったら、浅黒くて頭が三つに分かれている犬を見つけ
猛ダッシュで走り出しました。目が怖いです。

「ワンコさまやぁぁあああ！」
「ぐぉぉお来るな！来る……っ早い！！足速いなお主！！」
「キャッチアンドリリースですぜワンコさぁぁあん！！」
「意味が分からん！！」

高校生新記録並の足の速さを無駄に使いながらその場を駆け回る岸本さん。
だんだん目眩がしてきました。本当にこの人を参考にしても良いものなのでしょうか。

１４　色欲イニシアティブ※

どうも。チェ・ジウォンです。
昨日は大惨敗でした。
三つ頭のある犬を満足するまで追い掛け回した後、岸本さんは出張サービスのため
外へ出て行かれました。お店で接客する通常のケースより指名額が高くなるので
あまりそのサービスを使われるお客様はいないと聞いていたのですが……。
岸本さん侮れません。
結局帰ってきたのは夕方7時頃で、それからはテレビ見たりお風呂入ったりして
お肌の手入れ後、１０時に就寝されました。
なんの収穫も無く私も部屋へ帰って休む事に。溜め息が出ました。

しかし今日こそは岸本さんの必勝法を掴んで見せます。
がっつり朝食を取った後、岸本さんの部屋へ直行しました。

「パンツ見せろ」

覗ける程度に扉を開けた途端聞こえてきた台詞に、心臓が止まりそうになりました。
昨日といい今日といい、岸本さんに関わってると恐ろしい発言が多くて困惑します。
なにかこう、相手にそんな発言をさせる何かが岸本さんにはあるのでしょうか。

もしそうだとしても私はそんなスキル欲しくありませんが……。
岸本さんとは違う、そのボーイソプラノの声の持ち主を確認すべく
隙間から目だけ動かして
左右を確認します。

「まぁ良いですけど、何で私なんですかね？もっと美人な方が沢山いますよここ」
「うるさいな。美人相手じゃ緊張しすぎてじっくり見れないだろ」
「ああ、なるほど」

いやなるほど、じゃないです岸本さん。それにパンツは見せちゃ駄目です。
岸本さんと向き合うように椅子に座っている今回のお客様は、身長が低く声が高い。
多分子供、それも男の子のようです。
なぜかブルーグレーの西洋の鎧で全身を包んでいて、顔は見えません。
そのせいでちゃんとした年齢は定かじゃありませんが、身長的に１３歳前後だと思われます。
少し動くたびに鎧特有の重苦しい音がしています。

「じゃあ今脱ぎますんで」

えぇ？ちょっと、岸本さん本気ですか。パンツ見せるんですか。
あ、ベルト外した。どうしよう本気だ。止めるべきだろうかどうしよう。
混乱しているうちに鎧を着た子供が「待った」と岸本さんの脱衣ショーを静止しました。
助かった。私は脱力して壁にもたれ掛りました。

「スカートとか無い？…それを脱いで見せるのは、ちょっと……エロすぎる」
「ほほぅ。なかなか粋な感性を持ってらっしゃいますなぁ」
「ケンカ売ってんのお前」
「着替えて来ましょうか？スカートに」

岸本さんの今日の服装は黒のロングTシャツにジーンズのストレートパンツ。それから上着に
黒と白のボーダーのカーディガンでした。
しかし岸本さん、アグレッシブすぎる。驚きすぎて心臓が痛い。
意外と貞操観念の軽い人なんだろうか。
鎧の子供はしばらく悩んだ後、左右に首を振った。

「……やっぱ無理っぽいなぁ」
「色気の無い私でも駄目なんじゃ、道のりは遠いですなぁ」
「お前それ自分で言っちゃうんだ」
「なんなら次は胸から攻めてみます？」
「胸…ムネねぇ……」
「そのくらいは平気にならないと、人間と契約する時きついと思いますよ」
「分かってるけどさ。得手不得手ってもんもあるじゃん？」

どうやらあのお客は魔族なのに性的なものが苦手で、
それを克服するために娼婦の中では比較的貧相な（ごめんなさい）
岸本さんを練習台に
指名したらしいです。
まだ子供なのだからあの位純粋なほうが良いのでは、とも思うが、
魔界の住人としてはそうも
いかないのかも知れない。
なんて考えているうちに岸本さんが鎧に包まれた手を取り、自分の

胸へと押し当てた。
「うぉい！」と私の心の声と鎧の子供の叫び声が重なった。

「やわ、らかい！無理！！ギブギブ！！」
「そう言わず。あと5秒くらいは我慢して下さい」
「ぐぅぁっ……きっつい！！」

ぐいっと渾身の力を込め腕を引く子供。
そのせいで腕の部分、肘から先の鎧が外れてしまった。
しかし鎧が外れてしまったことより、中身が空洞になっていることに驚愕しました。
どうやらそういった系統の魔族の方らしいです。
でもそうなると、どこから声を出してるんでしょうか。素朴な疑問です。

「あ、すいません。取れちゃいましたねぇ」
「……返せ」
「はいはい。怒らなくても返しますよぅ」
「別に腕取れたこと怒ってんじゃないし。お前ほんと、恥じらいとかないのかこの痴女」

岸本さんから乱暴に腕を取り上げると、元の場所にガチリと嵌め込みました。
私はお客の言葉に何度も頷いていました。
女性なんだからもう少し羞恥心だとか貞節だとかを持って頂きたい。
大体相手は子供（？）だし、ここが魔界じゃ無かったら犯罪に等しいレベルの行為です。
岸本さんはそこら辺もっとしっかりしたお人だと思っていたのですが……。
しかしそのがっかり感も、次の言葉でキレイに吹っ飛びました。

「私の恥じらいよりも貴方の方が大切ですからねぇ。大目に見てやってください」

満面の笑みを浮かべる岸本さん。
日常会話などではだらしくなく見えるであろうその表情は、この状況下であの台詞の後
だとなんだか可愛く見えた。これぞ岸本さんマジック。

「……かか、か、帰る！帰る！！」

鎧の子供は慌てたように席を立ち、扉のほうまで向かってきた。
すかさず近くの柱へ身を隠す私。
「まだ一時間経ってませんよ」と岸本さんが引き止めるが、お客は小走りにその場を
立ち去って行きました。
岸本さんはうな垂れ、重い溜め息を吐いていました。
どうやら失敗したと思っているようですが、あのお客様は遅かれ早かれ
また岸本さんを指名しに来る気が私はします。
そんな事を考えながら柱の影から岸本さんを覗いていたら、ふと目が合ってしまいました。
どうしましょう。この体勢じゃ明らかに私、不審人物です。

「どーも。こんにちわ」
「あ……こんにちわ」

どんな質問をされるかと身構えていたら、実にあっさりとした挨拶で返されました。
どうやら疑われてはいないようで安心しました。

「今日も私の尾行ですか？ご苦労様です」

……前言撤回です。私が付けまわしていた事、完全にばれてます。

「い、つから……あの…知って…」

「いやぁ、こんな可愛い子が近くに居たら、普通気が付きますよ」

にっこり笑う岸本さん。

その言葉に、ぐわぁっと顔が熱くなりました。

岸本さんはそれじゃあと言って自室へ戻って行きます。

その背中を眺めながら、今までうすらぼんやりしていた事が確信に至りました。

私はメモ帳に「一撃必殺」と書いた後、その文字に赤ペンで二重線を引きました。

15　脳内警告を無視

午後2時ごろポニーテールちゃんと紺ジャージさんが訪問する予定なので
私の手持ちの中で一番金額的に高い着替えを用意し、自室のお風呂に入った。
あの人たちはこの世界での貴族に部類されるので、最低限の身だしなみを整えるためだ。
ダブル洗顔抜かりなし。ムダ毛処理準備万端。
優しい香りのボディソープで身体を念入りに洗い次は髪を、と洗髪作業に移ろうとした時
脱衣所の方から物音がした。
いや物音どころか浴室の扉（曇りガラス仕様）から人影らしきものも見える。
どういった事態なのか把握することが出来きない私は、取り合えず髪を手櫛で整えた。
どんな状況でも女の子の髪型は重要です。

「……入るぞ」

その言葉と共にガラッと扉が開けられた。
そこに居たのは包帯といつもの紺ジャージを着ていない紺ジャージさんだった。
ん？何か字面が可笑しい気がする。
素っ裸に腰タオル一枚という出で立ちの紺ジャージさんは扉を閉め、そのまま
入り込んできた。

男性のこんな姿はお父さん以来だったのでまじまじと見入ってしまう。
無駄な肉のないソフトマッチョは裸体だとさらに迫力があった。

「どうなさったんです急に」
「……背中を、流しに来た」
「いやぁ、身体はもう洗っちゃいました」
「反応が……良くないな」
「きゃー！とか、紺ジャージさんのエッチ！とか言った方が良かったですかね」
「そうだな……是非”エッチ”と叫びつつお湯をかけて欲しかった。あと前くらいは隠せ」
「すみません。そういった方面に疎いもんで」
「まぁ、いい。……お前は友達だからな」
「友達？」
「身体が終わってるなら……次は」

なにがなんでも洗いっこしたいらしい相手は、少し泡の残る私の髪に触れた。
髪を撫で付ける紺ジャージさんの手の暖かさがじんわりと滲むように伝わってくる。
出しっぱなしのシャワーの音がノイズのように聞こえた。
上からとめどなく降ってくる水のせいで目がまともに開けていられない。

「顔が赤いですよ。大丈夫ですか」
「……大丈夫じゃない」
「まじですか」
「ああ、マジだ……うぉげぇえええ」
「ＮＯォォォオオオ！！」

浴室に紺ジャージさんのリバース音と私の大絶叫が響き渡った。

――後片付けを終えリビングへ行くと、テーブルにポニーテールちゃんが座っていて、
きっと自分で淹れたのであろう紅茶を飲んでいた。
紺ジャージさんに脱衣所を貸してしまったため私はこちらで着替えようとしていたのだが
そうもいかなくなってしまった。
そんな私の心境を汲み取ってか「私のことは気にしなくて良いわ」
と言ってくれたが、
先程紺ジャージさんに羞恥心の足りなさをやんわり注意された後だったので、ここは
弁(わきま)えてトイレで着替えを済ますことにした。
今日は一心不乱の字が入ったパンツはやめておこう。

「愚兄が迷惑をかけたようで、ごめんなさいね」

笑うのを堪えているためか、ポニーテールちゃんの肩が少し震えていた。
機嫌良いらしく、いつもより表情が柔らかい。
その雰囲気は我が家のジェニーちゃん（ペットの亀）に似ていてとても癒される。

「いえいえ。それより何で今日はこちらに？」

お茶菓子を戸棚から出し、ポニーテールちゃんの前に置きながら向い側の席に座る。

いつもは出張サービスをご利用頂いているのに、どうして今日だけ訪問に変えたのか。
もしお金が掛かりすぎてうんうぬんなお話しだったら、今後は一切この人たちの指名を受け付けないことにしよう。

「友達の部屋を見たいって、お兄様が駄々こねたからよ」
「お風呂場でも友達だから、とか言ってましたなぁ。光栄ですけど突然どうして…」
「昨日あんたが言ったんじゃない。ほら、日本のドラマ見てた時」
「ドラマ……」
「お兄様感化されやすいから」

興味なさそうに出されたお菓子を一つつまむポニーテールちゃん。
そういえば昨日訪ねたとき、紺ジャージさんの部屋で三人でテレビを見た。
部屋は完全ヨーロッパ風なお城には不似合いな現代の電子機器や家具で埋め尽くされていて、
アニメポスターだとかゲームだとかも山のように積んであったと記憶している。
ドラマが終わり、エンディングロールを目で追っていたとき
『……親友か。良いな、欲しい』
『引き篭もりのお兄様じゃ無理ですわ』
『そうか……だが、欲しいな。夕焼けの下で殴り合ってみたい』
『あ、なら私がなりましょうか？』
『お前は賞味期限が切れていても、一応異性だろうが……。親友は同性と決まっている』
なんて会話をした。そうだ。しました確かに。
でもあれ？これだと眼中にも無かったように感じるんですが。

「あの後どのような心境の変化が……」
「アリアが熱ぅい友情モノのドラマやアニメ見せながら、
”親友っていうのは性別や種族を超越した関係なの”って説得したから」
「んん？なぜに？」
「そろそろお兄様には妹離れしてもらわないとね。ついでに邪魔くさい恋敵も片付けられて
一石二鳥。良い考えだと思わない？」
楽しそうに笑うポニーテールちゃん。
あれほどムカデさんや美人さんとは何も無いと指名されるたびに否定したのに、どうやら
全く信じて貰えていなかったらしい。
そうこうしている内にガチャリと脱衣所の扉が開き、紺ジャージさんがいつもの格好で
出てきた。
「汚してしまってすまない。年増の裸は見るに耐えなくてな……」
ふぅ、と息を付きながらまだ濡れている髪を拭く紺ジャージさん。
「むぅん。あんなこと言ってますけど、私なんかが恋愛対象になるんですかね？」
「……ふん、馬鹿ね。これから改善させていくのよ」
「ご期待には添えない気がするのですが…」
「おい。……ペットボトルの飲み物はあるか」
「え、ああ。そこの冷蔵庫に入ってますんで、お好きにどうぞ」
「そうか……なら一本、貰う」
紺ジャージさんは言われたとおり冷蔵庫から飲み物を取り出し、一

気に呷った。
そして半分くらい残ったそれを私の前に差し出す。
目の前に持ってこられたので思わず受け取ったが、どうしろというのだろう。
まさか処分しろというのだろうか。それとも飲めと言うのか。

「……友達と言えば、回し飲みだろう」

飲めという方向でした。お礼を言いながらその飲み物を貰う。
しかし睨み付けるかのような紺ジャージさんの視線が痛くて、なかなか飲み辛い。
ポニーテールちゃんはにっこにこしながらその様子を眺めていた。
余程私と紺ジャージさんを片付けたいというか、くっ付けたいらしい。
何度か咽(むせ)そうになりながら、かろうじて飲み下す。

「……飲んだな」
「はぁ、ごちそうさまです」
「よし。次は土手で……殴り合いするぞ」
「殴り合いっすか。足技はありですか」
「無しだ。……あと技名は大声で言えよ」
「インダス文明パーンチ！とか？」
「そのネーミングセンスはどうなん……いや、まぁそんな感じだ」

さぁ来いと腕を掴まれ、半ば引きずられ気味に紺ジャージさんに付いて行く。
ポニーテールちゃんが気になって振り返ると、力尽きたように両手で顔を覆っていた。
どうやら私たちは恋愛へは発展しないと判断したようだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2029x/

魔物に娼婦

2011年11月21日17時13分発行